

[研究報告]

平成22年度特別研究 社会教育における美術大学の役割に関する研究 (彫刻からのアプローチ)

A Study on Roles for the Sculpture Course of Art College to Play as Social Educator

石田陽介

ISHIDA Yohsuke

1. 研究の目的

大学の社会への開放、公開が強く求められている昨今だが、美術分野においてはその接点として「教育」という観点を見逃すことが出来ない。学校教育や技能教育という観点ではなく生涯にわたって自己を啓発し、何かに向かって取り組み続けるという、いわゆる生涯学習的な意味での教育が有効と言える。なぜなら我々の表現活動はつまるところ永遠の自己探求とも言えるからだ。

では具体的にどのようなことが美術大学にできるのだろうか。それを考える際に、平成20年度に彫刻専攻で取り組んだ「美大はワンダーランド」が一つのヒントとなる。この取り組みは、美大という空間が、我々内部の目から普通に見えることが、一般の人々から見た場合にいかに不思議で魅力的でエキサイティングなものであるか、ということを知ってもらおうという試みであった。ことさらに新しい取り組みを行うのではなく、普段のままの美大を体験してもらうことで美術やもの作りの魅力を直感してもらうことが目標であった。

我々は大学の有する知的、人的、物的財産を社会に還元することで、豊かな情操を育む機会を提供することが可能である。特に彫刻は素材と直に触れることで人間の本能的な部分に訴えることができよう。本年度は「親子で楽しむ木彫」の体験教室を開催し、子どもたちの情操教育はもちろんのこと、成人にも彫刻の魅力に触れてもらい、生涯にわたって美術を愛好する心情に目覚めてもらえればと考えている。この成果を踏まえ美術大学の社会に対する役割を考察していきたい。

2. 「親子制作体験教室」の内容

目的にもあるように、この研究は大学というある意味で閉じられた世界をほんの少し開くだけで、魅力のある社会教育の母体となりうるということを念頭に置いたものである。したがって、普段の制作を基本にすえ、いわゆる「本物体験」が出来るように努めた。募集の案内には「親子でチャレンジ！本格的な木彫をつくろう!!」というキャッチコピーで参加を呼びかけた。開催日はA組平成22年8月21日(土)、22日(日) B組28日(土)、29日(日)の各2日で、適宜休息をはさみながら午前9時から午後4時まで行った。参加対象は小学校4・5・6年生および保護者。制作内容は30～50cm立方程度の様々な形や種類の木を準備し、人物や動物、空想したものなど、好きなかたちを自由にノミ等で彫ってもらうこととした。

3. 「親子制作体験教室」の流れ

①木を選ぶ・道具に慣れる

木を選ぶ際には木の特徴を知る必要がある。事前に考えてきた下絵をもとに、様々な形や種類の木を直に触れ各自材料を選んだ。また、試し打ちを行い



道具の安全な使い方の指導を行った。

②大きな形を作る

事前に準備した下絵をもとに材料に墨で描き、余分な部分をノコギリで落とす。時間の都合上、スタッフがチェーンソーを使って行った。



③ノミを使った粗彫り・中づくり

大きなノミで大まかなかたちを彫りだす。作業が進むに従ってノミの種類も小さなものを用いる。



④小づくり・仕上げ

細かい部分には彫刻刀を用い、節穴があいた材料は埋木をして形を整えた。

⑤作品の鑑賞会

仕上がった作品を参加者全員で鑑賞し、感想を述べ合った。

以上、①から⑤は二日間の大まかな流れであるが、これは我々が普段取り組んでいる木彫制作や授業と同じ組み立てである。初心者向けに易くなるよう心がけたが原木から完成へと至る点では本物体験ということが出来よう。

4. 「親子制作体験教室」を終え

学生スタッフの援助があったとはいえ、参加者が

丸太から2日間(実質12時間)でノミを使って作品を仕上げる集中力は目を見張るものがあった。アンケートの結果を見ても、難しさやしんどさについて述べられてはいるが、それを上回る楽しさや充実感について数多く述べられている。また作品の大きさもおおむね20cmから30cm立方のもので、「こんな大きい作品が作れるとは思わなかった」という感想が多く寄せられている。また「参加前に期待していたものと実際に参加されて違いがありましたか?」という設問に20名中17名が「期待以上に面白かった」と回答しているのを見てもその満足度が伺える。親子で汗流し仕上がった作品は大切な思い出の品となったに違いない。生涯にわたって美術を愛好する心情の目覚めの一助となったといえよう。

指導する学生も自身の得意な面が生かして、普段の授業では見られない一面を見せていた。親子が制作を通して触れ合う姿に接することも貴重な経験となったであろう。今後教育者となるか否かは別としても、ものを作る人間としてこの体験は大切な糧となるにちがいない。その意味においても社会教育としての意義を見いだすことが出来よう。

今回参加された方々は参加の動機に「木彫を体験してみたかったから」と回答された方が15名に上った。もともと興味を持って参加されたのであるから好意的な回答が寄せられるのは当然といえよう。今後は興味を持つきっかけを作るような取り組みも検討していかなければならない。「教育」というと少し敷居が高いように感じられであろうが、ものつくりや手を動かすというようなありふれたことの中にこそ「教育」の端緒があることを忘れてはならない。



(いしだ・ようすけ 彫刻)